

# 子どもの認知する親への親和性と関係性攻撃との関連

—関係性攻撃経験および関係性攻撃経験後の対人関係に及ぼす影響を中心に—

姜 信善・大重 絵美里\*

An Analytical Study of Relations between Parental Affiliation and  
Relational Aggression

—The Effect of Relational Aggression Experience and Peer Relations—

Sinsun KANG, OEmiri OHSHIGE

キーワード: 関係性攻撃、仲間関係、親和性、親子関係、小学生

Keywords: relational aggression, peer relation, affiliation, parents relation, elementary school children

## 問題と目的

これまで、子どもの仲間関係や対人関係について多くの研究が行われてきた。その中で、子どもの仲間関係や対人関係へ影響を与える要因の1つとして子どもの認知する親の養育態度に着目した研究が行われ、それらが子どもの仲間関係や対人関係へ与える影響が明らかにされている。

例えば、戸ヶ崎・坂野(1997)は、母親の養育態度が拒否的であると認知している子どもほど、現在築いている関係を持続させようとする関係維持行動や、築いた関係をより深めるといった関係向上行動のような社会的スキルにおけるまずさを見出している。そして、最終的には母親の養育態度が拒否的であると認知した場合は、そのような養育態度が子どもの社会的スキルを媒介し、仲間からの社会的受容に影響を与えることを明らかにしている。また、子どもの認知する母親の養育態度は子どもの仲間関係のさまざまな側面に影響を与えるが、父親との関係についての認知も仲間関係形成に影響を及ぼすことが報告されており、子どもが感じる父親からの受容感が高いほど、仲間関係形成に関する有能感が高いことが見出されている(松崎・松永, 2004)。なお、中学生とその親を対象とした酒井・菅原・眞榮城・菅原・北村(2002)では、子どもが母親と父親に抱く信頼感は、子どもの人間関係を中心とする学校適応に影響を与えていることが示されており、さらに、親と相互の信頼関係が形成されている子どもの学校適応はほぼ良好であるのに対し、そうでない子どもは学校に不適応傾向を示すと同時に、反社会的

な仲間関係を形成しやすいことが見出されている。

さらに、親子関係の対人関係への般化を考慮に入れば、他者との関係形成への影響を検討した研究によると、親子関係が対人関係に及ぼす影響については、次のように指摘されている。すなわち、受容的な親子関係から自己に対する肯定感や他者に対する信頼感が形成され、人間に対する信頼感にもとづいてお互いに理解し合い支え合うという受容的な人間関係が形成されるという。その反対に、拒否的な親子関係では、自己否定感や他者への不信感が形成され、不信感にもとづいて拒否的な人間関係が形成されるといわれている(森下・木村, 2004)。

これらのことから、子どもが親との間に信頼関係が形成できていると認知すること、親から受容感を感じることが、子どもの望ましい仲間関係の形成に大きく影響することが考えられる。

ところが、子どもの仲間関係問題の1つに関係性攻撃(relational aggression)がある。関係性攻撃の概念を提唱したCrick & Grotpeter(1995)は、関係性攻撃を「仲間関係を操作することによって相手に危害を加えることを意図した攻撃行動」と定義している。その具体的行動には、敵対視している子どもをグループから締め出すために無視をするよう呼びかけたり、悪い噂を流したりすることが挙げられる。

関係性攻撃は上述のように仲間関係に働きかけることにより、攻撃対象へ間接的に危害を加える攻撃行動である。そのため、関係性攻撃についての研究では、関係性攻撃を行うといった加害者についてだ

\*富山大学大学院教育学研究科

けでなく、関係性攻撃そのものを仲間関係の問題として捉え、行われている。

すなわち、関係性攻撃を示す幼児や児童ほど仲間から拒否されていること (Crick & Grotpeter, 1995; Crick, Casas, & Mosher, 1997)、関係性攻撃児の仲間集団内での関係は親密であると同時に排他的であることが示されており、関係性攻撃はグループ外ではなく、グループ内の子どもに向けて行われることが報告されている (Grotpeter & Crick, 1996)。

このように、関係性攻撃が現在の仲間関係において影響を及ぼすだけではなく、関係性攻撃経験がその後の対人関係に影響を与えることが示されている。すなわち、姜・大重 (2004) では、小学生を対象に、友達の悪いうわさや「あの子を知らんぷりしよう」などと言った能動的経験、聞かされた受身的経験、言われる対象になった被経験というような関係性攻撃経験が対人関係に及ぼす影響を検討した。その結果、「関係重視」、「不信・拒否」、「他者懸念」、「関係枠づけ」、「選択的拒否」の5因子が見出された。つまり、これらの関係性攻撃経験により人との関係を重視するようになる一方で、仲間に対する疑いや不安、拒否感といった対人関係を否定的に捉えやすくなるという側面も示された。

以上のように、自ら関係性攻撃を示すことが仲間から拒否される要因の1つであることが明らかとなった。また、関係性攻撃を経験することにより、対人関係を形成する上で相反する影響が及ぼされることが示された。すなわち、関係性攻撃経験後、人との関係を大切に思うようになるという反面、他者の目を強く気にするようになる、または、他者を受け入れにくくなるとともに、特定の仲間関係に固執しやすくなるといった望ましくない影響を及ぼすことが示されている。このことから、関係性攻撃は子どもの仲間関係やその後の対人関係に負の影響を及ぼす強い要因の1つであることが考えられる。

ところが、仲間関係や対人関係の様々な側面に影響を与える要因として親子関係が示されており、関係性攻撃が行われるような仲間関係における問題や、関係性攻撃経験による対人関係への影響は、親子関係の在り方によって異なることが予想される。

すなわち、親子関係において、子どもが親に対して受容感や信頼感のような心のよりどころ、または親密さを感じることで良好な仲間関係の形成につな

がることを考慮したとき、親から受容感や信頼感を感じる子どもは関係性攻撃の経験そのものが少ないことが考えられる。また、例え、関係性攻撃という仲間関係におけるネガティブな出来事を経験した場合においても、親子関係が良好であれば、その後の対人関係においての疑いや拒否感を抱きにくく、良い関係を築こうとする態度や姿勢を持ちやすいことが予想される。しかし、親子関係と子どもの関係性攻撃経験との関連や、親子関係が関係性攻撃経験後の対人関係へ及ぼす影響を検討した研究はほとんど見当たらない。これらのことを明らかにすることにより、子どもの仲間関係や対人関係の問題についてさらなる理解が深まるのではないだろうか。

そこで、これらの点を明確にするために、本研究では小学生を対象に、まず、親子関係と子どもの実際の仲間関係との関連を検討する。実際の仲間関係については、子ども自身の今の友人関係についての評価および仲間関係の中での関係性攻撃経験の2つの側面から捉える。次に、親子関係が関係性攻撃経験後の対人関係に及ぼす影響について検討する。

ところが、親子関係に関しては、子どもが親に対して信頼感 (酒井・菅原・眞栄城・菅原・北村、2002) や受容感 (戸ヶ崎・坂野、1997; 松崎・松永、2004) を感じることで子どもの円滑な仲間関係や向社会的行動に影響を与えることが報告されている。親に対する信頼感や受容感は子どもの親への心理的、情緒的な結びつきやすさのあらわれであり、子どもが親を心理的な支えとしていることとしてみなすことができるであろう。そのように考えたとき、親子関係の検討において、子どもが親へ好意をよせ、愛情のきずなを感じていることをあらかず親和性の側面からのアプローチにより、より明確な知見が得られると考えられる。また、酒井・菅原・眞栄城・菅原・北村 (2002) の研究により、子どもの学校適応に影響を与えるのは、子が親に抱く信頼感の方であり、親が子に抱く信頼感は関連が認められないことが報告されている。つまり、子どもが認知している親の養育態度が子どもの心理的・行動的側面の発達要因として、より重要な指標になるのではないだろうか。このような観点から本研究では、親子関係については子どもの認知する親への親和性を取り上げ、検討する。

以上のことを考慮した上で本研究の仮説は次の通りである。

仮説1. 子どもが親に対して親和性をより強く認知することは、子ども自身の友人関係を望ましいものと捉えることにつながるであろう。また、子どもが親に対して親和性をより強く認知することは、関係性攻撃を自ら行うことや、関係性攻撃の対象とされるといった、直接的に関係性攻撃に関わる経験を少なくするであろう。

仮説2. 子どもが親に対して親和性をより強く認知することは、関係性攻撃経験後の対人関係において否定的になることを少なくすることにつながるであろう。

以上の仮説を検討するための本研究の具体的目的は、以下の通りである。

- 1) 子どもの認知する親への親和性と子どもの友人関係評価および子どもの関係性攻撃経験との関連について調べる。
- 2) 子どもの認知する親への親和性が子どもの関係性攻撃経験後の対人関係に及ぼす影響について調べる。

## 方法

1. 調査対象児 T県内の公立小学校3校の5年生と6年生それぞれ7クラス、合計365名のうち、性別、学年不明児4名を除いた361名を分析対象とした。

2. 調査時期 2004年12月中旬

### 3. 調査内容

1) 子どもの認知する親への親和性

子どもの認知する親への親和性については、森下

(1981)により作成された子どもの親に対する親和性尺度を用い、調べる (Table 1 参照)。森下による尺度は、第1因子「親密さ」7項目、第2因子「同一視欲求」6項目、第3因子「信頼性」4項目の計17項目で構成されている。親への親和性が高いほど高得点になるように得点化された。

### 2) 関係性攻撃経験及び関係性攻撃経験群の分類

#### 2-1) 関係性攻撃経験について

被験児に、友達に他の友達についての「悪い噂さ」や、「知らんぷりをしよう」などと (1)『自分が言ったことがある』、(2)『友達から他の友達のことを聞かされたことがある』、(3)『自分の「悪い噂さ」などを言われたことがある』、(4)『どれもあてはまらない』の4項目を設けて、どれにあてはまるのか、あてはまるもの全てに○をつけるよう回答を求め、調べた。

#### 2-2) 関係性攻撃経験の分類について

姜・大重 (2004) の分類基準と同様であり、2-1) で調査した関係性攻撃の経験をもとに、関係性攻撃の加害経験、被経験に分類した後、さらに、加害経験は自ら関係性攻撃を行ったものか、他者からの働きかけによるものかによって、それぞれ能動的経験、受身的経験に分類し、これらの経験の組み合わせによって関係性攻撃経験群の分類が行われた。分類の結果、①能動的経験群、②受身的経験群、③被経験群、④能動・受身的経験群、⑤能動・被経験群、⑥受身・被経験群、⑦全経験群、⑧経験なし群に分けられた。ただし、①能動的経験群、③

Table 1 「子どもの親に対する親和性」尺度項目

項目
親密さ
1 あなたは おとうさん、おかあさんと 気持ちが通じあっていると思いますか。
2 あなたは おとうさん、おかあさんに言われたことは 何でも よろこんでいたいと思いますか。
3 おとうさん、おかあさんは あなたのことを よく知ってくれていると思いますか。
4 あなたは おとうさん、おかあさんを親切で思いやりのある人だと思いますか。
5 あなたは おとうさん、おかあさんを やさしい人だと思いますか。
6 おとうさん、おかあさんは いつも あなたのことを 気にかけてくれていると思いますか。
7 おとうさん、おかあさんはあなたのいいぶんを よく聞いてくれると思いますか。
同一視欲求
8 あなたは 大きくなったら おとうさん、おかあさんのようになりたいですか。
9 あなたは たいていのことは おとうさん、おかあさんを 手本にしたいですか。
10 あなたは おとうさん、おかあさんのしていることで あんなことができたらいいと思うことが多いですか。
11 あなたは おとうさん、おかあさんのまねをすることが 多いですか。
12 あなたは さびしくなったとき おとうさん、おかあさんを心に思いうかべますか。
13 あなたは おとうさん、おかあさんが悲しんでいると あなたまで悲しくなりますか。
信頼性
14* おとうさん、おかあさんは あなたとの約束を よくやぶりますか。
15* あなたは おとうさん、おかあさんを 不公平な人だと思いますか。
16 あなたは おとうさん、おかあさんと できるだけいっしょに 遊んだり話をしたりしたいですか。
17 あなたは おとうさん、おかあさんを えらい人だともいますか。

注)\*は逆転項目

Table 2 関係性攻撃経験の分類基準および群別の人数の内訳

群名	内容	関係性攻撃経験			人数[名]	割合[%]
		加害経験		被害経験		
		能動的経験	受身的経験	被経験		
能動的経験群	自ら関係性攻撃に関与した可能性のみが考えられる群	有り	無し	無し	13	4( 4)
受身的経験群	受身的ではあるが関係性攻撃に関与した可能性のみが考えられる群	無し	有り	無し	97	27( 31)
被経験群	攻撃対象となった可能性のみが考えられる群	無し	無し	有り	13	4( 4)
能動・受身的経験群	自ら、かつ、受身的に関係性攻撃に関与した可能性が考えられる群	有り	有り	無し	58	16( 18)
能動・被経験群	自ら攻撃し、かつ、攻撃対象になった可能性がある群	有り	無し	有り	5	1( 2)
受身・被経験群	受身的に関与し、かつ、攻撃対象になった可能性が考えられる群	無し	有り	有り	51	14( 16)
全経験群	加害経験と被経験の両方の経験の可能性が考えられる群	有り	有り	有り	78	21( 25)
計					315	87(100)
経験無し群	関係性攻撃の加害、被害経験のない群	無し	無し	無し	46	13
合計					361	100

注) ( )内は関係性攻撃経験児 315 名を分母とした割合 [%] である。

被経験群、⑤能動・被経験群は被験者の数が不十分であったため、分析対象から除外された。関係性攻撃経験群の分類基準および群別の人数 (%) の内訳を Table 2 に示す。

### 3) 関係性攻撃経験による対人関係への影響の測定

関係性攻撃経験による対人関係への影響の測定には、関係性攻撃経験による対人関係への影響尺度(姜・大重, 2004)を用いた。この尺度は、第1因子「関係重視」10項目、第2因子「不信・拒否」5項目、第3因子「他者懸念」3項目、第4因子「関係枠づけ」4項目、第5因子「選択的拒否」3項目の計25項目で構成されている (Table 3 参照)。これらの25項目に対して、小学生に関係性攻撃経験からどのように思うようになったのか、経験なし群に対しては、いつもどのように思っているのかを「全くそう思う」(5点)～「全くそう思わない」(1点)までの5件法で求め、影響が大きいほど高得点となるように得点化された。

### 4) 友人関係評価と友人関係評価群の分類

子どもたちが普段学校で友達と過ごしていてどのように思っていたかという子ども自身の友人関係の評価について調べるために、自由記述形式で調査を行った。具体的には「あなたは、友達といっしょに過ごしていて、どんなことを思っていましたか?」についての回答が求められた。

収集された回答内容を検討した結果、以下のよう

に分類された。

- 関係良好群：友達を好ましいものとして捉えており、その関係については快いものとして満足している。例えば「困っている時に力になってくれるのでいいと思う」、「とても気が合うので楽しい」など。
- 関係肯定群：友達に対して不愉快な思いをすることがあるが、そうであっても、友人関係を大切なものとして考えている。例えば「ちょっとむかつくときもあるけど、友達がいてよかったな」と思う気持ちの方が大きい」、「わがままを言われても、大切な仲間だから大事だと思う」など。
- 関係不満群：友達に対する嫌悪感を感じ、その関係については不快感を抱いている。例えば「友達にわがままを言われて、なんか、いやだなあと思っています」、「じまんされたりするといやな気分になります」など。
- 関係拒否群：関係不満群においてのように友達を否定的な存在として捉えており、さらに、その関係を絶ちたいと思っている。例えば「すぐに悪口を言うのでいっしょにいたくない」、「うるさい人ばかりなのであまりいっしょにいたくない」など。

分類後、回答者344名の中からその中の約25%にあたる86名の回答をランダムに抽出し、第2著者ともう一人の学校心理学専攻の大学生1名によって

Table 3 「関係性攻撃経験による対人関係への影響」尺度項目

項目
<p>関係重視</p> <p>1 人の悪口は言わない。</p> <p>2 だれにでも同じように接する。</p> <p>3 人を傷つけることはしない。</p> <p>4 だれとでも仲良くする。</p> <p>5 自分がきれいな人がいても、友達もきれいになるようにしない。</p> <p>6 うわさだけで「この人はこういう人だ」と決めつけない。</p> <p>7 「悪いうわさ」や「知らんぷりをしよう」と言われても、その通りにしない。</p> <p>8 友達の大切さを考える。</p> <p>9 自分のきれいな人でも、きれいだとわかるようにしない。</p> <p>10 友達に言われた通りに行動するのではなく、自分で考えて行動する。</p> <p>不信・拒否</p> <p>11 自分と友達との仲が良いと思うことができない。</p> <p>12 心から信頼できる友達ができない。</p> <p>13 人と接するのがこわい。</p> <p>14 グループで行動するのがいやだ。</p> <p>15 友達に本音を言うことができない。</p> <p>他者懸念</p> <p>16 友達の言うことや行動から、友達がどう思っているのかが気になる。</p> <p>17 友達が自分のことをどのように思っているのかが気になる。</p> <p>18 友達が他の友達をどのように思っているのかが気になる。</p> <p>関係枠づけ</p> <p>19 仲の良い友達だけでグループを作る。</p> <p>20 いつも決まった人と遊んだり行動したりする。</p> <p>21* 「悪いうわさ」や「知らんぷりをしよう」と言われても、それを気にしない。</p> <p>22 みんなとちがうことはしない。</p> <p>選択的拒否</p> <p>23 「悪いうわさ」や「知らんぷりをしよう」と言われる子とは話したり遊んだりしない。</p> <p>24 「悪いうわさ」や「知らんぷりをしよう」と言う子とは話したり遊んだりしない。</p> <p>25 きらいな子とは話したり遊んだりしない。</p>

注)\*は逆転項目

Table 4 友人関係評価の分類基準および群別の人数の内訳

群名	内容	人数(名)	割合(%)
関係良好群	友達を好ましいものとして捉えており、その関係については快いものとして満足している群 例：“困っている時に力になってくれるのでいいと思う”	237	69
関係肯定群	友達に対して不愉快な思いをすることがあるが、友人関係を大切なものとして考えている群 例：“わがままを言われても、大切な仲間だから大事だと思う”	33	10
関係不満群	友達に対する嫌悪感を感じ、その関係については不快感を抱いている群 例：“友達にわがままを言われて、なんか、いやだなあと思っています”	56	16
関係拒否群	関係不満群と同様に友達を否定的な存在として捉えているが、その関係を絶ちたいと思っている群 例：“すぐに悪口を言ってくるのでいっしょにいたくない”	18	5
合計		344	100

独立評定を行った結果、85.04%の一致率が得られた。

友人関係評価群の分類基準および人数の内訳を Table 4 に示す。

**4. 調査手続き** 調査は被験校3校のうち、2校(5年生、6年生それぞれ6クラスずつ)は各クラ

スの担任教師の教示により、1校(5年生、6年生それぞれ1クラスずつ)は調査者の教示により集団形式で実施された。回答所要時間は約25分であった。なお、クラス担任の教示による場合、調査者と同様の教示内容が伝えられた。

Table 5 友人関係評価群による「子どもの親に対する親和性」尺度の下位尺度得点の平均とSDおよび分散分析結果

		M(SD)	N	主効果	下位検定
第1因子 親密さ	関係良好群	17.230(2.786)	217	F(3, 307)=3.284*	関係拒否群<関係不満群、関係肯定群、関係良好群
	関係肯定群	16.839(3.121)	31		
	関係不満群	16.768(3.033)	56		
	関係拒否群	15.167(3.485)	18		
第2因子 同一視欲求	関係良好群	13.123(2.659)	219	ns	
	関係肯定群	13.033(2.619)	30		
	関係不満群	12.857(2.519)	56		
第3因子 信頼性	関係良好群	10.014(1.702)	223	F(3, 307)=4.601**	関係拒否群<関係不満群、関係肯定群、関係良好群
	関係肯定群	9.667(1.561)	30		
	関係不満群	9.891(1.663)	55		
	関係拒否群	8.444(2.036)	18		

\*\*\*p < .001, \*\*p < p.001, \*p < .05, † p < .10

Table 6 関係性攻撃経験群および性による「子どもの親に対する親和性」尺度の下位尺度得点の平均とSDおよび分散分析の結果

		性	M(SD)	N	主効果	交互作用	下位検定
第1因子 親密さ	受身的経験群	男	17.410(2.562)	39	F(4, 283)=4.990**	ns	受身・被経験群、能動・受身的経験群、全経験群<受身的経験群、経験なし群
		女	17.692(2.119)	52			
		全体	17.571(2.310)	91			
	能動・受身的経験群	男	16.231(2.889)	26			
		女	16.344(3.012)	32			
		全体	16.231(2.889)	58			
	受身・被経験群	男	15.429(3.906)	21			
		女	16.200(3.354)	25			
		全体	15.848(3.596)	46			
	全経験群	男	16.303(3.396)	33			
		女	16.539(3.025)	39			
		全体	16.431(3.179)	72			
経験なし群	男	17.379(2.583)	29				
	女	18.455(2.167)	11				
	全体	17.675(2.495)	40				
第2因子 同一視欲求	受身的経験群	男	13.255(2.527)	40	F(1, 283)=6.912**	ns	男<女 受身・被経験群、全経験群、能動・受身的経験群<受身的経験群
		女	13.887(2.367)	53			
		全体	13.602(2.446)	93			
	能動・受身的経験群	男	12.000(2.483)	25			
		女	13.133(2.636)	30			
		全体	12.618(2.607)	55			
	受身・被経験群	男	12.000(3.237)	22			
		女	12.577(2.817)	26			
		全体	12.313(2.998)	48			
	全経験群	男	12.031(2.443)	32			
		女	12.897(3.267)	39			
		全体	12.507(2.937)	71			
経験なし群	男	12.692(2.112)	26				
	女	13.727(2.005)	11				
	全体	13.000(2.108)	37				
第3因子 信頼性	受身的経験群	男	10.244(1.640)	41	F(1, 283)=3.811 †	ns	男<女 全経験群、受身・被経験群、能動・受身的経験群<受身的経験群
		女	10.327(1.438)	52			
		全体	10.290(1.522)	93			
	能動・受身的経験群	男	9.500(1.606)	26			
		女	9.844(1.953)	32			
		全体	9.690(1.799)	58			
	受身・被経験群	男	9.091(2.068)	22			
		女	9.760(1.640)	25			
		全体	9.447(1.863)	47			
	全経験群	男	9.313(1.655)	32			
		女	9.615(2.021)	39			
		全体	9.479(1.858)	71			
経験なし群	男	9.607(1.499)	28				
	女	10.167(2.038)	12				
	全体	9.775(1.672)	40				

\*\*\*p < .001, \*\*p < .01, \*p < .05, † p < .10

## 結果

### 1. 子どもの認知する親への親和性と仲間関係との関連

#### 1) 子どもの認知する親への親和性と友人関係評価との関連

子どもの認知する親への親和性が友人関係評価にどのように関連しているのかを検討するために、友人関係評価群を独立変数、子どもの親に対する親和性尺度(森下, 1981)の下位尺度得点を従属変数とする分散分析を行った。結果をTable 5に示す。分散分析の結果が有意である場合、下位検定として、LSD法(有意水準5%)による多重比較を行った。

その結果、「親密さ」因子および「信頼性」因子においては、群の主効果が有意となった(順に、 $F(3,307)=3.284, p<.05$ ;  $F(3,307)=4.601, p<.01$ )。下位検定の結果、「親密さ」および「信頼性」のいずれの因子においても、関係拒否群より他の3つの群が高い得点であった(順に、 $Mse=8.410, p<.05$ ;  $Mse=2.923, p<.05$ )。「同一視欲求」因子においては、有意な結果が得られなかった( $F(3,307)=2.100, ns$ )。

#### 2) 子どもの認知する親への親和性と関係性攻撃経験との関連

子どもの認知する親への親和性が関係性攻撃経験にどのように関連しているのかを検討するために、関係性攻撃経験群および性を独立変数、子どもの親に対する親和性尺度(森下, 1981)の下位尺度得点を従属変数とする2要因分散分析を行った。分析結果をTable 6に示す。分散分析の結果が有意である場合、下位検定として、LSD法(有意水準5%)による多重比較を行った。

その結果、「親密さ」因子においては、群の主効果が有意となり( $F(4,283)=4.990, p<.01$ )、下位

検定の結果、受身的経験群、経験なし群は他の3つの群より得点が高かった( $Mse=8.412, p<.05$ )。「同一視欲求」因子においては、群および性の主効果がそれぞれ有意であった(順に $F(4,283)=3.034, p<.05$ ;  $F(1,283)=6.912, p<.01$ )。下位検定の結果、受身的経験群は経験なし群を除いた他の3つの群より得点が高く( $Mse=7.080, p<.05$ )、女子が男子よりも得点が高かった。「信頼性」因子においては、群の主効果が有意となり( $F(4,283)=3.186, p<.05$ )、性の主効果は有意傾向であった( $F(1,283)=3.811, p<.10$ )。下位検定の結果、受身的経験群は能動・受身的経験群、受身・被経験群、全経験群より得点が高く( $Mse=3.004, p<.05$ )、女子が男子より高い傾向が示された。

### 2. 子どもの認知する親への親和性と関係性攻撃経験後の対人関係への影響との関連

#### 1) 子どもの認知する親への親和性と関係性攻撃経験後の対人関係への影響との相関関係

関係性攻撃経験後の対人関係への影響尺度得点と子どもの親に対する親和性尺度(森下, 1981)の各因子項目得点との相関関係をTable 7-1に示す。

「関係重視」因子と子どもの親に対する親和性尺度の3つの全ての因子、親密さ、同一視欲求、信頼性との間では正の相関関係が有意であった(順に、 $r=.273, .322, .298, p<.01$ )。いずれにおいても「不信・拒否」と親密さ、信頼性との間に有意な負の相関関係がみられた(順に、 $r=-.215, p<.01$ ;  $-.131, p<.05$ )。「関係枠づけ」因子と子どもの親に対する親和性尺度の3つの全ての因子、親密さ、同一視欲求、信頼性との間において負の相関関係が有意であった(順に、 $r=-.119, p<.05$ ;  $r=-.134, p<.05$ ;  $r=-.170, p<.01$ )。「選択的拒否」因子と信頼性との間に負の相関関係が有意であった( $r=-$

Table 7-1 「関係性攻撃経験による対人関係への影響」と「子どもの親に対する親和性」との相関関係

	第1因子 関係重視	第2因子 不信・拒否	第3因子 他者懸念	第4因子 関係枠づけ	第5因子 選択的拒否
第1因子 親密さ	.273**	-.215**	-.026	-.119*	-.034
第2因子 同一視欲求	.322**	-.044	.065	-.134*	-.081
第3因子 信頼性	.298**	-.131*	-.003	-.170**	-.161**

\*\* $p < .001$ , \* $p < .05$ , †  $p < .10$

-.161,  $p < .05$ )。「他者懸念」因子と子どもの親に対する親和性尺度の全ての因子との間においては、有意な相関関係はみられなかった。

## 2) 子どもの認知する親への親和性が関係性攻撃経験後の対人関係へ及ぼす影響

関係性攻撃経験後の対人関係への影響尺度得点を目的変数、子どもの親に対する親和性尺度(森下、1981)の各項目得点を予測変数とする重回帰分析を行い、関係性攻撃経験後の対人関係への影響の要因として、子どもの認知する親への親和性を検討した。分析結果の詳細は次の通りであり、各変数の標準偏回帰係数をTable 7-2に示す。

「関係重視」の場合、「親密さ」の偏回帰係数は  $\beta = .039$  (要側検定:  $t(266) = .463, ns$ ) であり、「同一視欲求」の偏回帰係数は  $\beta = .210$  (両側検定:  $t(266) = 2.696, p < .01$ ) であり、「信頼性」の偏回帰係数は  $\beta = .146$  (両側検定:  $t(266) = 1.810, p < .10$ ) であった。したがって、「関係重視」に及ぼす影響は「同一視欲求」において有意な正の効果が、「信頼性」では有意傾向にすぎなかったが負の効果が得られたが、「親密さ」の効果は有意でなかった。なお、このときの回帰式全体の説明率は  $R^2 = .349$  であり、有意であった ( $F(3, 266) = 6.347, p < .01$ )。

「不信・拒否」においては、「親密さ」の偏回帰係数は  $\beta = -.284$  (両側検定:  $t(279) = -3.294, p < .001$ )、「同一視欲求」の偏回帰係数は  $\beta = .176$  (両側検定:  $t(279) = 2.221, p < .05$ ) であり、「信頼性」の偏回帰係数は  $\beta = -.059$  (両側検定:  $t(279) = -.719, ns$ ) であった。したがって、「不信・拒否」に及ぼす影響は「親密さ」において有意な負の効果が、「同一視欲求」の場合は有意な正の効果が得られたが、「信頼性」の効果は有意でなかった。なお、

このときの回帰式全体の説明率は  $R^2 = .246$  であり、有意傾向であった ( $F(3, 279) = 3.760, p < .10$ )。

「他者懸念」では、「同一視欲求」においてのみ有意傾向であり(偏回帰係数:  $\beta = .158$ 、両側検定:  $t(280) = 1.944, p < .10$ )、「親密さ」および「信頼性」の効果は有意でなかった。なお、このときの回帰式全体の説明率は  $R^2 = .119$  であり、有意であった ( $F(3, 280) = 2.727, p < .05$ )。

「関係枠づけ」の場合、「信頼性」においてのみ「関係枠づけ」に有意な負の効果を及ぼすことが示されたが(偏回帰係数:  $\beta = -.182$ 、両側検定:  $t(273) = -2.190, p < .05$ )、「親密さ」および「同一視欲求」の効果は有意でなかった。なお、このときの回帰式全体の説明率は  $R^2 = .192$  であり、有意であった ( $F(3, 273) = 2.732, p < .05$ )。

「選択的拒否」に及ぼす、「親密さ」、「同一視欲求」、「信頼性」についてはいずれにおいても有意な効果は得られなかった。なお、このときの回帰式全体の説明率は  $R^2 = .163$  であり、有意傾向であった ( $F(3, 278) = 2.492, p < .10$ )。

## 考察

本研究の主な目的は、子どもの認知する親への親和性が子どもの仲間関係および関係性攻撃経験後の対人関係に及ぼす影響について検討することである。

そのために、まず、子どもの認知する親への親和性と普段の子ども自身の仲間関係との関連を検討した。ここで、子どもの仲間関係については、子どもが自分自身の友人関係をどのように捉えているのか(友人関係評価)、また、仲間関係に影響を及ぼすとされる関係性攻撃の加害、被害経験の有無を調べた。次に、関係性攻撃経験がその後の対人関係に及ぼす

Table 7-2 「関係性攻撃の経験による対人関係への影響」と「子どもの親に対する親和性」の重回帰分析の結果

	第1因子 関係重視 (n=266)	第2因子 不信・拒否 (n=279)	第3因子 他者懸念 (n=280)	第4因子 関係枠づけ (n=273)	第5因子 選択的拒否 (n=278)
第1因子 親密さ	.039	-.284**	-.087	.041	.117
第2因子 同一視欲求	.210**	.176*	.158 †	-.054	-.025
第3因子 信頼性	.146 †	-.059	-.059	-.182*	-.208*
重相関係数 (R)	.349***	.246***	.119	.191*	.163 †

注) 数値は標準偏回帰係数 ( $\beta$ ) 表す。 \*\*\* $p < .001$ , \*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , †  $p < .10$

影響は、子どもが日頃感じる親への親和性の程度とどのような関連がみられるかを調べるために検討を行った。ここでは、分析結果についての考察を行う。

## 1. 子どもの認知する親への親和性と仲間関係との関連

### 1) 子どもの認知する親への親和性と友人関係評価との関連

子どもの認知する親への親和性と友人関係評価との関連についてみると、「親密さ」因子および「信頼性」因子においては、いずれも関係拒否群が他の3つの群、関係良好群、関係肯定群、関係不満群より低い得点を示した。すなわち、「親密さ」や「信頼性」因子の項目は因子順に「おとうさん、おかあさんはあなたのことを気にかけてくれていると思いますか」、「あなたはおとうさん、おかあさんを不公平な人だと思いますか（逆転項目）」などのそれぞれの内容から成り立っており、このような項目内容から、関係拒否群は他の群より普段の生活において親からの心遣いや公平さを感じる事が少ないことが推察される。そして、このような親との関わりのまずさは、他者に対する受容的な態度やつながりを感じることに於いて、負の影響を及ぼすものと解釈される。特に、関係拒否群と関係不満群とでは友達に対する苛立たしさや嫌悪感を抱いている点においては共通しているが、関係拒否群の場合は、友達に嫌悪感を抱くだけでなく、友達への拒絶感に至ることにおいて関係不満群と異なっている。このような違いは、関係拒否群における親への親密さや信頼性の低さが、友人関係においても受容的であたたかい関係を築きにくくすることに影響を及ぼしたことによるものと考えられる。したがって、この結果は、仮説1の前半部分の「子どもが親に対して親和性をより強く認知することは、子ども自身の友人関係を望ましいものと捉えることにつながるであろう」をある程度支持するものとみなされる。

### 2) 子どもの認知する親への親和性と関係性攻撃経験との関連

子どもの親に対する親和性尺度の3つの全ての因子において子どもの関係性攻撃経験群による有意差がみられ、「親密さ」因子においては、受身的経験群、経験なし群が他の3つの群より得点が高く、「同一視欲求」因子および「信頼性」因子では、いずれ

においても受身的経験群が、経験なし群を除いた他の3つの群より得点が高かった。すなわち、子どもの親に対する親和性尺度の全ての因子において、受身的経験群は経験なし群を除いた他の3つの群より項目得点が高かった。このように親に対する子どもの強い親和性は、他者に対しても親しみ深い関係を築きやすくすることにつながるのではないかと推察される。故に、受身的経験群における親和的親子関係は、他の友達の悪口を聞かされる経験をした場合においても自らが関係性攻撃を示すことや関係性攻撃の対象にされることが少ないといった、他者との望ましい仲間関係を形成しやすくするのではないかと解釈される。したがって、この結果は仮説1の後半部分である「子どもが親に対して親和性をより強く認知することは、関係性攻撃を自ら行うことや、関係性攻撃の対象とされるといった、直接的に関係性攻撃に関わる経験を少なくするであろう」を支持するものとみなされる。

ところが、「同一視欲求」因子および「信頼性」因子ではいずれにおいても女子が男子より高い得点を示した。これは、母親の子どもの性別による関わりの違いが1つの原因として考えられる。すなわち、小学校5、6年生の場合、母親との関係は父親との関係に比べ、より密接であり（廣田、2004）、特に女子は男子よりも母親からの援助や母親への信頼をより多く感じていることが示されている（上西、2002）。そのような女子の母親との関わりの深さが、親のようになりたいという「同一視欲求」や、親を頼りに思うという「信頼性」において男子よりも高くなることに影響を及ぼしたのではないかと推察される。

以上のように、友人関係を拒否的に捉えたりせず、また、関係性攻撃に直接的に関わることの少ない子どもは、親への親和性をより強く認知していることが明らかとなった。これらの結果から、子どもの親に対する強い親和性を認知した場合、良好な友人関係が形成されやすくなること、他者の悪口を言う、他者から悪口を言われるといった関係性攻撃への直接的な関与が少なくなることが示された。

## 2. 子どもの認知する親への親和性と関係性攻撃経験後の対人関係への影響との関連

親に対する親和性尺度の因子と、関係性攻撃経験後の対人関係への影響尺度の因子との間に有意な相

関関係がみられた (Table 7-1 参照)。よって以下では、親への親和性と、関係性攻撃経験後の対人関係に及ぼす影響との関連についての分析結果からより具体的に検討し、考察を行うこととする。

子どもの親への親和性は、関係性攻撃という仲間関係における望ましくない経験をした後の対人関係において、他者に対する不信や疑いへ影響を及ぼす一方、円滑な関係の形成において強い影響を及ぼすことが示された。以下、具体的にみていく。

まず、子どもの親に対する「親密さ」は、関係性攻撃経験後の「不信・拒否」因子に有意な負の影響を及ぼしている結果が得られた。これに関しては、「親密さ」の項目「あなたはおとうさん、おかあさんと気持ちが通じあっていると思いますか」などに示されているように、子どもの親との情緒的きずなは他者に対する親しみやすさにつながり、人と接することに対して不安を感じることを少なくし、他者不信に陥りにくくするのではないかと推察される。

次に、「同一視欲求」は、「関係重視」因子および「不信・拒否」因子において有意な正の影響を及ぼしており、「他者懸念」因子においては有意傾向として正の影響を及ぼしている結果が得られた。つまり、親への同一視欲求は、「関係重視」の項目「人を傷つけることはしない」、「だれとでも仲良くする」などに示されているように他者との関係を大切にす一方、「自分と友達との仲が良いと思うことができない」、「友達が自分のことをどのように思っているのかが気になる」に示されているように、他者に対する不信感や不安を抱きやすくなることにつながることが示された。「同一視欲求」は、「あなたはおとうさん、おかあさんのしていることであんなことができたらいと思うことが多いですか」などの項目に示されているように、子どもが親のようになりたいという欲求をあらわしている因子である。子どもが親を手本にすることにより、関係性攻撃経験後も他者のうわさ話に惑わされず、自分で判断し、関係を維持しようとしていることが考えられる。しかし、親を理想とする子どもにとって、関係性攻撃はその理想にそぐわない出来事であることから、親への強い同一視欲求を持った場合、関係性攻撃の回避のため、関係性攻撃の前提となる仲間同士の感情や意識を気にしたり、友達に対して不信を感じたりしやすくなるのではないだろうか。

最後に、「信頼性」は、「関係重視」因子において

有意傾向にすぎなかったが、正の影響を及ぼしており、「関係枠づけ」因子および「選択的拒否」因子において有意な負の影響を及ぼしている結果が得られた。このことから、子どもの親への信頼性は、多くの他者との円滑な関係の形成につながるものと解釈できる。信頼性は「おとうさん、おかあさんはあなたとの約束をよくやぶりますか (逆転項目)」、「あなたはおとうさん、おかあさんを不公平な人だと思いますか (逆転項目)」に示されているように、親の公平さや親の自分に対する誠実さをあらわしている因子である。子どもが一番身近な他者である親から誠実に接してもらっていると感ずることにより、子どもの心の安定が得られ、関係性攻撃経験後であっても、自分と他者との関係を重視し、特定の仲間固執することなく、多くの人との関係を形成することができると考えられる。

以上のことから、仮説2の「子どもが親に対して親和性をより強く認知することは、関係性攻撃経験後の対人関係に対して否定的になることを少なくするであろう」がある程度支持されたとみなされ、例え、関係性攻撃という仲間関係における混乱を経験した後であっても、親子関係において親密さや信頼を感じることができれば、他者との円滑な関係を保とうとすることが示唆された。また、親への同一視欲求を感じることは、他者との関係維持を心掛けたりするが、対人関係に不安を感じたり、他者を気にしたりすることにつながることが示された。

### まとめと今後の課題

本研究の結果から、子どもが親への親和性の中でも「親密さ」および「信頼性」を強く感じることは、自ら直接的に関係性攻撃に関わるものが少ないことにつながることで、友人との間に不満やトラブルがあったとしても関係を肯定的に捉え、友人に対して拒否的になりにくいことにつながることが示唆された。また、親への親密さや信頼性を強く感じることで、関係性攻撃経験という仲間関係におけるネガティブな出来事の後でも、他者に対して不信や拒否感を抱かず、円滑な関係を築こうとすることが明らかにされた。

ところが、本研究では親への親和性について、子どもの親に対するそのイメージを検討するにすぎなかったが、上述したように、子どもが親に対して親

和性を感じる事が友達とのより親しみ深い関係の形成のために重要であることが示唆された。しかし、ここでは子どもが親和性を感じる事ができる望ましい親子関係形成のための具体的な養育態度については調べられていない。親子関係は子どもの精神的健康や社会的適応、仲間関係などといった様々な側面に関わる重要な要因といえる。特に仲間関係はいじめや学校不適応などの、子どもにおける重大な問題を含んでいることを考えるとき、その問題の解決において親子関係からの検討が必要であろう。今後、望ましい親子関係形成のための養育態度を詳細に検討した上で、それらが仲間関係に及ぼす影響を明確にすることがその解決に結びつくと思われる。

### 参考文献

- Crick, N.R., & Grotpeter, J.K. 1995  
Relational aggression, gender, and social-psychological adjustment, *Child Development*, Vol.66, 710-722.
- Crick, N.R., Casas, J.F., & Mosher, M. 1997  
Relational and overt aggression in preschool. *Developmental Psychology*, Vol.33, 579-588
- Grotpeter, J.K., & Crick, N.R. 1996  
Relational aggression, overt aggression, and friendship. *Child Development*, Vol.67 2328-2338.
- 廣田 希代子 2004 親子の情緒的関係と子どもの攻撃性および抑うつ傾向との関連：児童期の子どもを対象として(発達教育臨床コース) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要 第51号 319-321
- 姜信善・大重絵美里 2004 小学生における関係性攻撃経験が対人関係に及ぼす影響 富山大学教育学部附属教育実践総合センター紀要 第6号 13-19
- 松崎亜希子・松永あけみ 2004 児童期のコンピテンスへの影響要因—仲間関係および親子関係との関連— 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編 第53巻 325-340
- 森下正康・木村あゆみ 2004 母親の養育態度におよぼす内的ワーキング・モデルとソーシャルサポートの影響 和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要 第14巻 123-131
- 酒井厚・菅原ますみ・眞榮城和美・菅原健介・北村俊則 2002 中学生の親および親友との信頼関係と学校適応 教育心理学研究 第50巻 第1号 12-22
- 戸ヶ崎泰子・坂野雄二 1997 母親の養育態度が小学生の社会的スキルと学校適応に及ぼす影響—積極的拒否型の養育態度の観点から— 教育心理学研究 第45巻 第2号 173-182
- 上西 幸代 2002 子どもに対する母親の態度の性差・世代差について 日本教育心理学会総会発表論文集 第44号 197

### 謝辞

本研究を実施するに当たり、質問実施に快くご承諾くださいました小学校の先生方より、多大なるご配慮とご協力をいただきましたことに厚く御礼申し上げます。また、被験者としてご協力をいただきました児童の皆様にも心から感謝申し上げます。

(2006年10月20日受付)

(2006年12月6日受理)